





羊
が
怒
る
時

三浦朱門

東都書房

羊が怒る時 定価260円

昭和36年 1月15日 第1刷発行

著 者 三 浦 朱 門

© Simon Miura 1961

発行者 黒 川 義 道

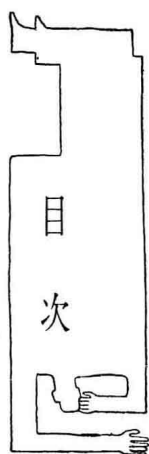
印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 横田製本株式会社

発行所 東 都 書 房

東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話 (941)3111 振替 (東京)72732

落丁本乱丁本はおとりかえします



交通事故 5

東京支社 13

津田という男 21

若い未亡人 29

偽りの書類 37

高級アパート 44

忙がしい日曜日 52

南伊豆 60

棄てられた服 67

ドライブ 75

もてない男 83

不思議な新婚旅行 92

ノックアウト 100

二人の女 109

留守番の娘 117

クリーム色の車 125

雨の朝 133

尾行 141

ぬれぎぬ 148

捨てられた鎖 156

青白い光 163

復讐 169

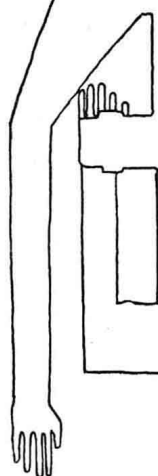
現場 177

ナンバー・プレート 184

敵と味方 192

遺書 199

プロポーズ 206



装幀

真鍋博



交 通 事 故

その日、藤田純夫は会社の下請をやっている町工場を廻っていた。彼の会社はゴムやビニールの製造会社である。フロシキなどにするビニールの捺染は下請に出している。製造部の一人として彼は下請工場との交渉を受け持っていた。

東京に産れて、東京の大学を出た世間知らずの藤田にとっては、大阪のオッサン、オバハンを相手に、金のこと、色事のことを、面白おかしく話しあうのは苦手だった。

「あんたはん、固いからなあ。いづれ、おもしろいところ、お伴しまほ」

しもたやめいた一軒の下請の町工場で、彼は何時果てるとも知らないおしゃべりの相手になっていた。彼の前任者は、これで会社をしくじった。下請のおっさんにおごられて、そこそ抜きさしならぬ関係になったのである。だから藤田は「どうやね今晚あたり……」といわれても、ニヤ

ニヤ笑いながら、

「はあ、いずれ日を改めまして……」

とへたな断りを言う。そこへ、手を染料で汚した小僧がやってきて、

「藤田はん本社から電話でっせ」

と知らせてきた。

母屋と工場の通路になっている台所に電話がある。母屋によせかけた土間の工場では、型枠かたわくを持った男女が長いむしろのようなビニールのまわりをめぐる、ボタン、ボタンと捺染の仕事をやっていた。

「もしもし、藤田です」

「あ、高塚だ」

「え、ああ、販売課長ですか」

製造部の藤田にくる電話としてはちょっと筋違いだった。これまでに、下請けを廻っている彼の所に本社から電話がくることは始終だったが、工場とか製造部の事務室からの電話に限られていた。

「いや、小林が、東京支社の小林が死んだというんだ。君と仲がよかったから一応知らせようと思つて」

「小林がですか。どうしたんですか」

「交通事故だというんだがね。電報がきただけでよくわからないんだ」

これで真紀子もついに二十そこそこで未亡人になった訳だ、と薄暗い電話口で、藤田は彼女の白い顔を思い浮かべた。

「とにかく、君と仲がよかったから、知らせようと思って」

「はあ、どうも」

電話を切ってから、藤田はこれはおかしいと思いなおして、真紀子のイメージを心の底に追いやった。何故高塚はわざわざ自分に小林の死を教えたのだろう。確かに一年前までは小林も藤田も高塚の下でビニールの販売をやっていた。二人は同年だったし、会社が戦後採用した最初の大卒出だったし、いろいろな意味で親くなるような条件を備えていた。

それに二人とも、経理にいた鶴羽真紀子^{つるは まきこ}を愛していた。もっとも藤田が彼女を愛していたことは、世界中で彼自身しか知らないはずだったが、彼は今でも会社の旅行の時に写した真紀子の写真^{しん}を、下宿の机の引出しにしまっている。

高塚課長^{たかづか}がそんないきさつを知っている訳がない。しかも馬鹿の一つおぼえのように、君と仲がよかったから、とくり返すのは、いかにも、会社のまわりの者に聞かせるための口実のようでもある。また、高塚は東京出身だが、平常は大阪弁を使うのに、先程は東京弁だったのが藤田の神経にひっかかっていた。彼が東京弁を使うのは、怒った時、真剣になった時に限られているのを、三年間、彼の下で働いているうちに、藤田は知るようになっていた。

「何か悪いことですか」

電話口に、下請のおやじが心配そうな顔でやってきた。彼等は電話一本で会社からの仕事と切れる不安に、いつもおびえているのだ。

「いや、僕と一緒に入社した奴が死んでね。東京で交通事故らしい」

「うわー、災難やなあ。実際、この頃の運転手はむちゃしよるから」
おやじはその言葉とは反対に、むしろほっとしたような顔をした。

会社に帰ると、藤田は高塚の所へ行った。

「先程は御親切に、どうも」

「いや、もう電報が来よって、もう、こっちは泡くっつてもうて。ところでやな、君は営業部へ戻って、東京支社へ行かんかな。うちの部長や、製造部長さんとならもう了解はついとんねけど」

「はあ、しかし」

「支社にはどうせ、人がいるしな、君は東京出身やから、ええやろうと思っくんねけど」

「はあ」

丁度、終業のベルが鳴ると、高塚はそのまま靴かばんをとりあげて、

「どや、その辺まで一緒に帰らんか」

と藤田をさそった。

バスで梅田までは一緒だったが、そこで二人は別の私鉄に乗りかえねばならない。バスに同じ会社の者が何人か乗り合わせて、二人に合流した。話はまず小林の死亡からはじまったが、すぐ真紀子の話になり、未亡人に關する淫^{みだ}らな話になり、間もなく、近頃のオモロイ所の話になってしまった。

藤田には色っぽい未亡人になった真紀子をどうしても想像できなかった。本社で働いていた頃の紺の上っ張りを着た真紀子、小林との新婚旅行をかねて、東京支社へ行く時のクリーム色のスーツを着た真紀子が思い出されるばかりである。

バスをおりと、高塚は後も見ずに、ずんずん歩き出した。彼が乗るべき私鉄とは方角違ひである。別れの挨拶をしようとして、藤田が追いつがっても、高塚はそっぽを向くようにして歩いて行く。

いつの間にか、二人は家へ急ぐ勤人達の群とは別の潮流、別の人混みにまぎれこんでしまった。すぐ先には、飯屋や劇場の並ぶ盛り場がある。そこまでくると、高塚はゆっくりあたりを見廻して、

「君、今晚つき合えよ」
と言った。

小料理屋の二階に上ると、高塚はオーバーのボタンをはずしたままの恰好であぐらをかいだ。

脱がせようとする女中を、うるさそうに、

「ビール」

と、追い払った。

「小林は轢き逃げされたんだ」

と言つてから、タバコをポケットから取りだして、ちゃぶ台の上にほうり出すと、

「奴は殺されたのかもしれない」

とつけ加えた。

ビールと料理を女中が並べている間、高塚はいらだたしそうに、口をつぐんで、女中の手元を見つめていた。女中も気配を察してか、一杯だけつぐと、そこそこに部屋を出て行った。

「東京支社の様子がおかしいんだ。売上げはこの所、確かにふえている。しかしそれが一般の景気の上昇や、本社の業績よりは常に下廻っている。この一年半ばかり前から、特にそれが目立つんだ」

「はあ」

「小林はそのために東京へ行ったんだ。業績のあがらない理由を調べ、その理由を除くためだ」

「そうだったんですか」

「今度は君の番だ。君を前にして言うのは何だが、君と小林は目下の所、会社のホープだから

な。小林を東京にやる時だって、君にするかどうか議論があったんだが、君は東京人だから、もうしばらく本社において、大阪になじませようということになった」

「小林が殺されたって、何か証拠があるんですか」

「そんなものがありや、警察がほうつてはおかないさ。しかし、彼は時々本社に報告していた訳だよ。その報告の内容が最近、ちょっとはつきりしたものをつかまえそうな様子を見せてきた」

「それ、拝見できるでしょうね」

「勿論さ。東京へ君が行く決心さえつけば」

「行きます」

高塚はポケットから、何通かの封書を取りだした。見おぼえのある小林の筆蹟で、高塚の私宅の宛名が書いてある。

東京支社は、数年前、関西のデパートが東京に進出した際に、会社がそこへ品物を入れていた関係もあって、それまでの代理店を昇格させて支社を作った。支社長は社長の長男の宮水泰彦である。まだ三十すぎたばかりで若い。東京のブルジョアの子弟が行くので有名な大学を出ているので、同級生や、同級生の父兄を頼って、販路を拡げうるという見込みで支社長になったのだ。勿論、取締役をかねている。

確かに彼は会社の誰よりも、東京では顔が広がった。そして彼の書く紹介状や、友人との交際

は支社の業績をあげた。しかし彼の能力はそれだけだった。会社の内情にも暗く、始終、学生時代の友人と遊び暮していた。

その下に東京販売課長がいる。川高かわたか和之かずゆきという五十男で、それまで本社の販売課長だった。高塚は戦後の財閥解体の時に会社に入ってきたので、川高に較べると新参ではあり、年が十以上も下だった。

川高が東京へ行くについては、事実上の支社長だから、栄転だ、という説と、高塚が課長になりたさに、東京へ追い払ったのだ、という説とがあった。もともとそれは藤田の入社する前のことだから、彼はその真相を知らないし、また興味もない。川高の下に数人の課員がおり、それは別に、支社長直属の経理課があつて、その責任者は、会社創立以来の勤続者で、工員からたきあげた吉元よしもとという、六十近い男が、二、三名の女事務員を使っている。経理課は課とはいっても、実質的には係といった程度の規模であり、課長というのも表面的で、社内の通念では係長程度の待遇だった。

「つまり川高課長が思う通り支社を切り廻して行ける訳だ。吉元なんかのよぼよぼにはわかりやしない。支社長はこれはまた飾り物みたいなもので、一日に四時間くらいしか会社におらんらしい」

「じゃ、怪しいのは川高さんですか」

「それはわからない。まあ、そういう目のつけ方が常道だが、小林もその線で長い間たぐって見

だが、はかばかしい答が出なかった。それで最近、方面を変えてみたら、おかしな取引先を見つけた、と報道してきた。交通事故はその直後なんだ」

「おかしな取引先というと」

「つまり、A社に安く売ったことにして、実はB社に高く売っている。そういう操作が行われているのを小林は発見したらしい。誰がやったかはわからない。彼はその調査中に死んだのだから」

「で、川高課長は……」

「一応、疑惑から外すと報告してきている」

「私はいつ東京へ行きましょうか」

「その時期なんだが、今すぐ行くと、かえって怪しまれるから、二週間ほどして赴任するのがいと思う。つまり支社から新しい人間を送れと言ってよこしてからの方が」

「わかりました。そうします」

「それから、今夜二人で会ったことは、秘密だぞ」

高塚は殆ど手をつけなかったビールや料理はそのままにして、立ち上った。

東京支社

東京の日本橋問屋街は、そこで取引される商品の量や金額の割に、みすばらしい店が並んでい

る。何も知らない素人しらうとが、「男物の鞆下を一足見せて下さい」と言つて、店員にケンツクを喰わされ、はじめてそこが問屋街であることに気づくほどだ。

そうは言つても、文庫本に混つた週刊誌のように、所々、中型のビルが建っている。銀行の支店とか、やや大きな商社のビルがそれだ。藤田の勤める丸一ゴムの東京支社も、そういうビルの四階の一部を借りていた。ビルの持主である敷物、カーテン、家具の上張り布地などを扱う会社は三階までを使って、四、五階は貸事務所にしていた。

一階が展示場になっているから、四階へ行くには、ビルの脇の裏口から入つて、エレベーターに乗らねばならない。

黒く汚れたエレベーターの金物の柵は、人が手をかける部分だけ黄色い地金を見せていた。東京駅についたその足で、支社にかけつけた藤田はその前に立つて、小林は一年間日曜以外は毎日ここでエレベーターに乗ったのだ。そう思うと、ふと心がしめつけられるような感動をおぼえた。

支社は二十坪ほどの大部屋と、六坪ほどの支社長室からなっていた。藤田が大部屋へ入ると、東京採用の女事務員が、切口上で、

「どちら様でいらっしゃいますか」

と聞いた。そのまぎれもない東京の下町口調は、彼女の着ている上っ張りが本社と同じ型のものだけに、藤田に奇異な感じを抱かせた。

「今度、支社に転勤になった藤田です」